

昭和 42 年 2 月、学園紛争が吹き荒れる中、ベニア板で囲まれた明治大学本校での入試に臨んだ。高校の担任教師が「私立を受験するのなら東京へ」と言ってくれたので、躊躇すること無く明治を選んだ。

生田キャンパスでのオリエンテーションが始まった日の午後、学生服を着た先輩の部活勧誘を受けた。体育会クラブの勧誘と思い、大学で通用するようなスポーツ特技の無い私は、手を振って断わろうとしたが、彼は「応援団だけど本校での練習を一度、見に来ないか？」と言った。あの時、何かの理由を告げて別れていたなら、その後の波瀾万丈は無かったが、「まあ、暇だし本校見学でもするか」と思った私は、その先輩について御茶ノ水の改札口を出ていた。結果を言えば、誰のものとは分からぬ汗臭い運動着に着替えて、何人かの入団希望者と一緒に先輩部員のマネをしながら大声を出している自分があった。

その夜、下宿の布団に倒れ込んだが興奮のあまり一睡も出来ないまま朝になった。

見学に懲りた私は、数日、普通の学生生活を始めていたが、ある日の授業を終えて教室を出たら、彼がまた廊下で待っていた。「今度の土曜日、六大学野球で明治の試合があるから神宮に来たら」と。学生応援席から見た彼ら部員はハツラツとしていて、青春を謳歌している姿に映った。高校時代、鬱々と受験勉強に明け暮れていた自分にとって、その中身を知らぬまま「羨ましい」と思った。

早々に入団を決めていた同級生に励まされながら、見習い部員としてズルズルと 3 か月ほど経った頃、新居浜市での 2 週間の夏合宿の日程を知らされた。とんでもない事になると怖くなった私は、退団届を郵送し、隠れるように帰省して故郷での夏休みを送っていた。

お盆を過ぎた昼下がり、真っ黒に日焼けした 2 年生先輩が自宅玄関に現れた時は本当にビックリした。四国合宿の帰途、奈良市内からバスで 1 時間の我が家まで会いに来てくれたのだ。「退団するなら、ちゃんとして辞めるよう、秋のリーグ戦が終わるまで逃げるようなことはするな」と言って帰って行った。

「リーグ戦が終われば辞められる！」それからの私は、1 年生の模範部員として朝からの団室当番も嫌がらず務め、生田には向かわず本校に通った。頑張る私の姿を見て、先輩や OB が飲食に誘ってくれ、同行する機会も増えた。彼らが話す辛かった下級生時代のことを聞くと、先輩達も乗り越えたのだなと思うようになった。その頃から、私は辞めたい同級生をなだめ励ます側になっていて、無届で休部する同輩の下宿や自宅を探し回り、夜遅くまで説得することも多かった。終電に間に合わず駅前の電話ボックスで始発電車を待ったり、名古屋や福井まで夜行で出かけたたりもした。高校時代、応援部で活躍していた人や憧れて自ら入団してきた人など、私から見れば精鋭部員に思えた同級生は 20 名以上いたと思うが、一年経ってみると 8 名になっていた。結局、この 8 名が卒業までの同期となった。

応援団の部員は野球や箱根駅伝に止まらず、スキー、スケート、アイスホッケー、サッカー、水泳、ボート、相撲など要請を受けた試合応援の他、三つの学園祭の実行委員（長）としての活動、入試や入学式、卒業式の会場整理や案内役としての役役もある。その他、OB の結婚式や葬式への出席、献血やアルバイト要請への動員、六大学連盟活動への参加、たまに TV 出演、レコード吹込み等々、勉強する時間が無いほど用事が多い。勿論、春と秋の六大学野球シーズン中は、午後 3 時から皇居一周の練習が毎日続く。それは千鳥ヶ淵まで走って武道館に向かっての発声。国会議事堂前から桜田門までうさぎ跳び。二重橋前公園でリーダー練習というもの。時代も変わり現在も同じことをしているとは思わないが、鮮烈な記憶として当時のことが思い出される。

今迄、あまり話したくない学生生活だったが、戦争体験を語る老人のように、時には披露することもある。「大学祭の出演依頼で高倉健さんに会いに行って、昼ごはんごちそうしてもらった事があるンや」、「TV の番組で藤田まことさん演じる団長と応援合戦したンや」などと、少し自慢げに。